

上の平遺跡

——平成6年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

1995. 3

茅野市教育委員会

UENODAIRA SITE

上 の 平 遺 跡

—平成6年度県営圃場整備事業古田地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

1995. 3

茅野市教育委員会

序 文

御作田上の平遺跡の緊急発掘調査は、県営圃場整備事業古田地区に伴うものです。発掘調査による記録保存は茅野市教育委員会文化財調査室により行なわれました。

この遺跡は昭和22年に豊平中学校生徒による調査が行なわれ、今回で4回目の調査となります。これまでの調査で縄文時代中期中葉と平安時代のムラの跡が発見されました。また遺跡の表面採集の結果から縄文時代中期後半の遺跡であることも判明しています。

今回の調査では、八ヶ岳山麓で隆盛をきわめた縄文中期文化の発端となる縄文前期末葉の遺構と遺物が発見されました。御作田上の平遺跡の縄文時代集落は、縄文時代中期中葉からその後半へと内容は未だ不明ながら利用され続け、縄文時代中期文化の興隆とともにあったことがうかがえます。このことから、本遺跡は八ヶ岳山麓の中でも代表的な遺跡の一つであることを示していると思います。御作田上の平遺跡は一部が調査されたのみであり、遺跡の大部分が現在の耕地の下に眠っています。この遺跡が後世の人々に引継がれ、将来の地域における歴史研究の資料となることを願っています。

御作田上の平遺跡の周辺には、未だ多くの遺跡が残っており、今後の圃場整備事業の進展の中で、幾つかの遺跡について発掘調査が計画されています。県営圃場整備事業櫻木地区に伴う発掘調査では、縄文時代中期初頭のムラの姿の一端が明らかにされました。埋蔵文化財の広範囲にわたる地道な調査に基づいた成果といえます。県営圃場整備事業古田地区に関わる発掘調査の中でも、本遺跡の資料が活用されながら八ヶ岳山麓における人々の生活が明らかにされていくことと思います。

発掘調査にあたり長野県教育委員会、地元地権者の皆様、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課の深いご理解とご助力を得て、発掘調査を無事終了することができました。心から御礼申し上げます。

平成7年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 昭二

例　　言

1. 本書は、長野県諏訪地方事務所長大西一郎と茅野市長原田文也との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成6年度県営圃場整備事業古田地区に伴う、長野県茅野市豊平上の平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と文化財国庫補助並びに県費補助金、市費等の公費により、茅野市教育委員会が平成6年度に実施した。調査組織等は第II章第1節5.調査の体制として記載した。
3. 発掘調査は平成6年9月14日から平成6年11月30日まで行ない、出土品の整理及び報告書の作成は平成6年12月から平成7年3月まで茅野市文化財調査室にて行なった。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担等は第II章第3節に記載した。
5. 本報告書に掲載した実測図は縮尺1/60とし、必要に応じ若干の変更を加えた。
6. 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第VIII系による。また遺構図に表わされている方位は座標北を示す。
7. 出土品及び諸記録は茅野市教育委員会文化財調査室に保管されている。
8. 遺跡名については米沢地区上の平遺跡と混同する可能性が認められたため、事務手続上は御作田上の平遺跡の名称を用いた。

目　　次

序 文	茅野市教育委員会教育長　岡角 昭二	
例　　言		
第I章	遺跡の概観	1
第1節	遺跡の立地と地理的環境	1
第2節	遺跡周辺の歴史的環境	1
1. 調査の歴史		1
2. 周辺の遺跡		1
第II章	発掘調査の概要	4
第1節	発掘調査に至るまでの経過	4
1. 調査に至るまでの協議		4
2. 表面採集調査と試掘調査の結果		4
3. 発掘調査、遺物整理、		
報告書作成の方法とその経過		4
4. 調査日誌（抄）		5
5. 調査組織		6
第III章	発掘された遺構と遺物	7
第1節	遺跡の層序	7
第IV章	結語	
1. 御作田上の平遺跡の出土の石器		23
2. 諸磯C式併行期の集落としての 御作田上の平遺跡		24
3. まとめ		24
	図版	

第Ⅰ章 遺跡の概観

第1節 遺跡の立地と地理的環境

本遺跡は長野県茅野市豊平御作田8783番地他に所在する（第1図）。大泉山の西麓に位置し、南を柳川に、北を大日影川に限られる。西は直線距離で約200mで台地先端となる（第2図）。柳川河床と台地平坦面との比高差は約10m、大日影川との比高差は約7mである。柳川をはさみ対岸に位置する台地は、柳川以北の台地に比べ約20cm高く、本遺跡が立地する台地よりは大泉山東方の神田頭A遺跡（第1図 茅野市遺跡台帳No.91）などが立地する台地と標高において連続性が認められる。

遺跡と大泉山との間には谷状の地形が広がっている。今次調査地点の位置する尾根は谷の出口を扼する位置にある。大泉山山麓には現在湧水が2ヵ所にみられる。この湧水から流れ出る小河川は谷の底面を通り南西方向に流れ出している。また大泉山山体の沢からも雨水が流れ込んでいたものと思われ、谷底は湿地であった可能性も考えられる。谷は北東から南東に向い柳川に落ちこんでいる。

試掘調査では、調査区北側に向うにつれ尾根平坦面に段差が生じ、調査区北端では第II次調査地点との間に傾斜面をはさんだテラス状の地形が形成されていたことが明らかになった。調査区北端部分の遺構検出作業では漸移層が確認され、後世の水田造成に伴う削平はわずかな部分に限られていた。今次調査地点の東側はこの谷地形の底面に向う斜面に続き、南側からは浅い谷の一部分が確認された（第2図）。調査区南端は後世の造成のため尾根先端部分が断ち切られている。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

1. 調査の歴史

御作田上の平遺跡の第I次発掘調査が行なわれたのは昭和22年である。⁽¹⁾ 遺跡の所在する台地の農道改修工事に伴う調査であり、豊平中学校生徒により調査が行なわれた。この時縄文時代中期中葉の整穴住居址が、少なくとも1基検出され多くの遺物が出土した。

その後昭和60年に第II次調査、平成元年に第III次調査が行なわれ、これまでに縄文時代の整穴住居址3基、平安時代の整穴住居址1基が調査された。平安時代の出土遺物には石器も含まれ、遺跡の性格について注意が払われた。今回の調査は第IV次調査となる。

2. 周辺の遺跡

本遺跡については今までの調査成果により縄文時代前期末葉と縄文時代中期初頭から中葉、平安時代後期と断続的に集落が営まれた遺跡であることが判明している。また茅野市教育委員会が実施した表面採集調査の結果縄文時代中期後半の遺物が採集されていることから、中期後半にも何らかのかたちで利用された遺跡であると考えられる。ここでは周辺の同時期の遺跡分布を中心に、本遺跡が立地している地域の歴史環境を概観しておきたい。

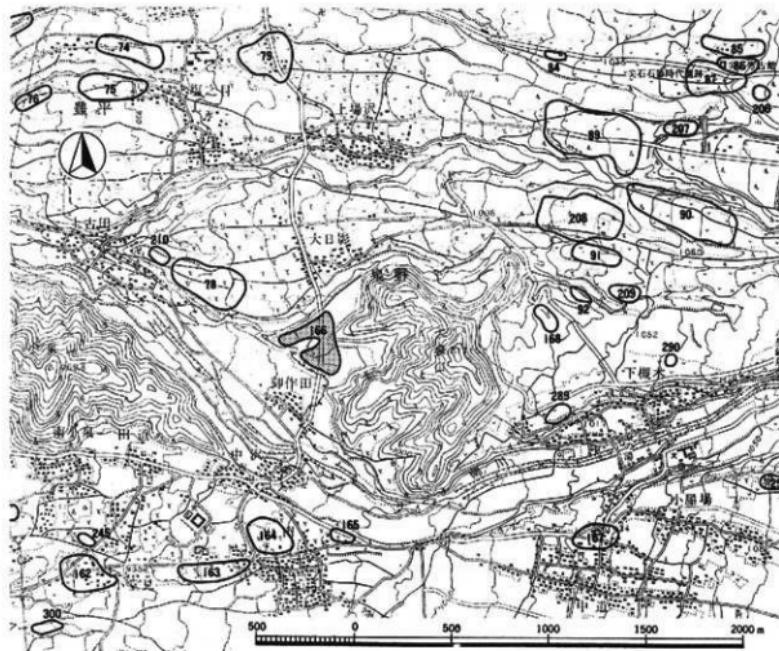
御作田上の平遺跡（茅野市遺跡台帳遺跡番号No.166）は、縄文時代前期初頭に利用が開始された。縄文時代早期から前期にかけての八ヶ岳山麓には、断続的ながら陥穴を中心とした遺跡や、集石を中心とする生活遺構が点在する状況にあったと考えられている。御作田上の平遺跡とは大泉山をはさんで東側の地域は既に圃場整備事業が終了し多くの遺跡が調査されているが、ほとんどの遺跡で縄文時代早期から前期初頭にか

けての陥穴や生活遺構が検出されている。陥穴が検出された遺跡としては、稗田頭A遺跡（No.91）、稗田頭B遺跡（No.209）、上見遺跡（No.168）がある。楳木中ツ原遺跡（No.92）では早期末の住居址が検出され、稗田頭B遺跡では陥穴のほかに縄文時代早期末の集石炉と、集石土坑が検出されている。集石土坑からは蛇文岩系の石材を用いた石製裝身具が出土している。

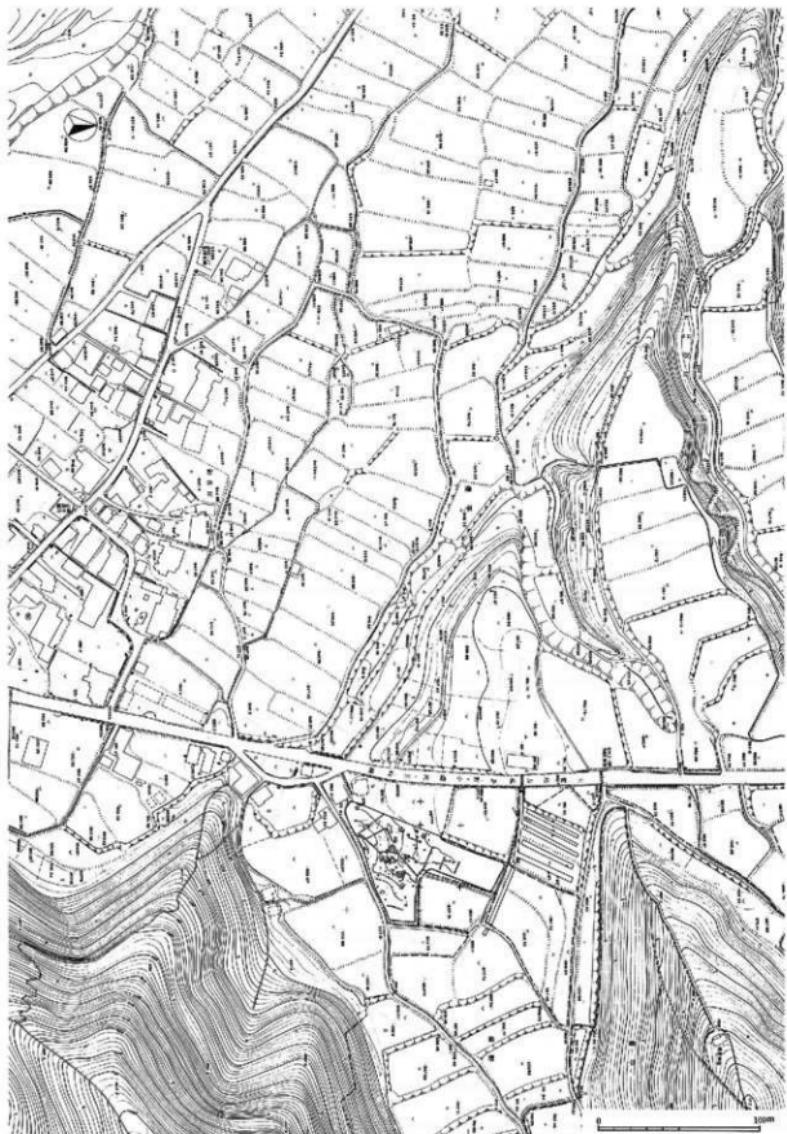
御作田上の平遺跡の第II段階は縄文時代前期末葉諸磧式併行C期である。本遺跡と隣接する地域で、この時期の遺物が採集されている遺跡には、向原遺跡（No.79）、日向上遺跡（No.74）、師岡平遺跡（No.78）のほか大泉山東側の鴨田遺跡（No.90）、稗田頭A遺跡（No.91）、金堀場遺跡（No.208）、柳川以南の丸生戸遺跡（No.172）が知られている。諸磧C式併行期は八ヶ岳西麓において遺跡が増加し始める時期であり、中期文化の母体となる文化が形成されるひとつの画期とみなされる時期である。この時期以降八ヶ岳西麓には恒常に集落遺跡が営まれるようになる。

平安時代の八ヶ岳山麓においては、ごく少数の住居址で構成される遺跡が特徴的に分布することから、本遺跡の遺構構成の解明が課題となっている。第2次調査地点からは石帯が出土していることからも、遺構構成と密度、継続時期を明らかにする必要がある。

以上のように御作田上の平遺跡の消長は八ヶ岳山麓の遺跡の消長と軌を一にしており、山麓における原始古代の歴史を探る上で、格好の資料であると考えられる。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区域 (1/3,000)

第II章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査に至るまでの経過

1. 調査に至るまでの協議

平成6年1月18日に、本遺跡の保護について長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業整備課、茅野市教育委員会文化財調査室により協議が行なわれた。その結果、本遺跡の保護については発掘調査による記録保存が図られることとなった。調査費については試掘調査により遺跡内容を確認した上で積算することとし、補正予算で対応することとなった。

この協議結果に基づき、5教文第7-12-56号平成6年度県営圃場整備事業（茅野市古田地区）にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）が長野県教育委員会より提出された。それによると御作川上田の平遺跡の保護については、事業地内にかかる2,000m以上を発掘調査し、記録保存を図るというものであった。この計画に基づき平成6年6月22日付をもって「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を取交わし、調査費用総額3,800,000円（農政部局負担3,344,000円文化財負担456,000円）で事業を行なうこととした。

2. 表面採集調査と試掘調査の結果

保護協議の結果、試掘調査による遺跡内容の確認が必要となったため、事前の表面採集調査を実施した。遺物は遺跡南側の尾根状地形から東斜面にかけての範囲で多く採集された。遺物分布範囲と圃場整備計画を参考に、平成6年6月21日から6月23日に試掘調査を実施した。その結果御作田上の平遺跡の中心と考えられる第II次調査地点付近の平坦面は、道路をはさんで東側から急激に落ちこみ、今次調査地点の存在するテラス状の地形へ続くことが判明した。この平坦面にも遺構が分布する可能性が高いことを勘案し調査区の設定を行なった。

3. 発掘調査、遺物整理、報告書作成の方法と経過

発掘調査の方法 遺跡は中央に浅い谷をはさんだテラス状の地形面を中心に広がることが想された。また今回の調査区の設定にあたり、遺跡東側斜面を調査範囲に含めたのは、多量の遺物が採集されたためである（第2図）。東斜面北半は、圃場整備による削平からまぬがれるため調査対象外とした。

遺構の調査にあたっては、遺構検出時において確認面と色調が異なり人為的な落ちこみとなる可能性を考えられたものを全て調査した。その結果遺構全体図（第3図）にみると100基以上の落ちこみを検出することとなった。住居址、窓穴、溝、ローム・マウンドについては、調査中に他の落ちこみと区別し遺構番号を与えたが、検出時において遺構の種類の認定が難しいものは、土坑として遺構番号を付した。そのため土坑の中には多種多様な落ちこみが含まれることとなった。整理作業から報告書作成までにおいて遺構の種類が判明したものもある。本来遺構番号は整理されるべきものであるが、本報告においては時間的な制約により欠番のまま報告している土坑が少なからずあることを御許し頂きたい。

遺構の実測は平板測量により行なった。遺構の記録は縮尺1/20とし、必要に応じて縮尺1/10の図を作成した。遺構測量の基準となる基準点及び水準点測量は、両角測量株式会社に委託した。発掘区内のグリッドは公共座標x=-330,000、y=-25770,000を基準とし5m間隔で設定した。

遺物の取り上げについては遺構単位とし、調査員が必要と判断したものに限り遺物分布図と出土状況微細図を作成し出土位置を記録した。遺構以外から出土した遺物については、発掘区域を東斜面、南斜面、平坦

面に分け、地形を単位として取り上げを行なった。

報告書作成の方法 本書においては、住居址と土坑については縮尺1/60で、その他の遺構については適宜縮尺を定め報告してある。遺物遺構の図化の際に使用した記号の凡例に付いては、図中に記した。なお報告書の執筆、作成と遺構、遺物の写真撮影は功刀が担当した。

4. 調査日誌（抄）

- 9月13日 調査区内表土剥ぎを開始する。
9月22日 発掘器材の搬入を行なう。
9月23日 表土剥ぎ終了。遺跡南側から遺構確認を開始。
10月17日 遺構調査を開始。適宜遺構の土層断面図、断面図を作成する。
10月19日 第1号住居址の調査に入る。
10月28日 雨のため午後の作業を中止し、室内で出土遺物、記録の整理を行なう。
11月7日 第2号住居址の調査を開始。
11月8日 南斜面の遺構平面実測を開始。
11月9日 遺跡南斜面の遺構確認を始める。
11月11日 調査区南側を一部引渡す。
11月15日 遺跡平坦部の遺構確認を開始。
11月18日 調査区全景写真撮影。
11月29日 調査を終了し、調査器材の搬出。
11月30日 現地を引渡す。



重機作業風景



遺構断面図作成



調査風景（東より）

5. 調査組織

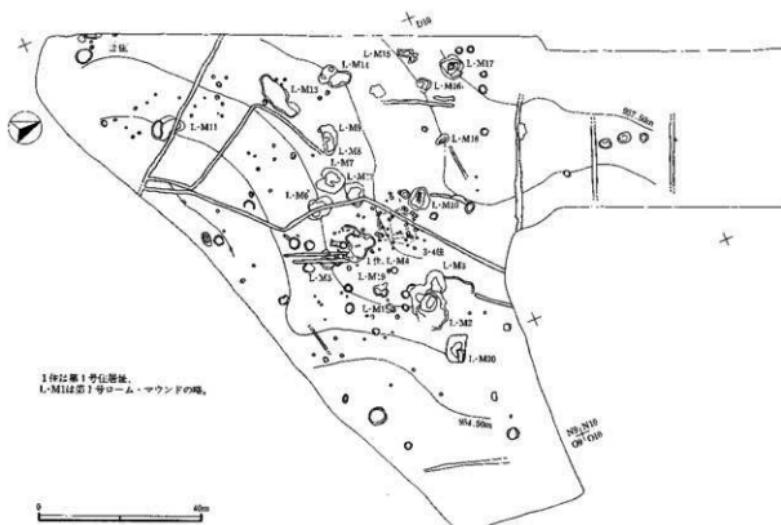
調査主体者	両角 昭二 (教育長)
事務局	宮坂 安雄 (教育次長)
文化財調査室	両角 英行 (室長) 鵜飼 幸雄 (係長) 大谷 勝己 小池 岳史 功刀 司 百瀬 一郎 小林 健治 柳川 英司 大月 三千代
調査担当者	功刀 司

発掘作業・整理作業協力者

赤堀彰子 (補助員) 小尾孝子 小尾和美 河西けき子 河西保明 福田幸宗 田中か志子 田中つかね
田中芳幸 長田倫子 永由文江 宮坂志め子 両角次郎 両角まさみ 両角美好

地元地権者である伊藤正光、額俊両氏から多大な御援助と御教示を賜わった。特に記し感謝の意を表したい。

基準点測量委託: 両角測量株式会社



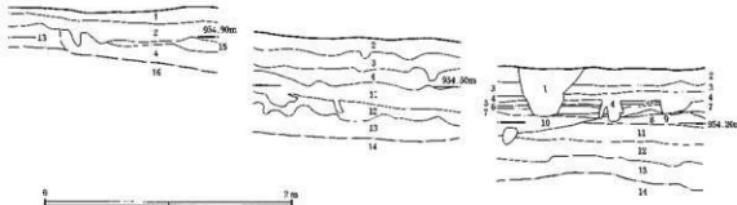
第3図 遺構全体図 (1/600)

第三章 発掘された遺構と遺物

第1節 遺跡の層序

遺跡の層序は地点によって大きな違いをみせる（第4図）。本遺跡の基本的な層序では、風性テフラの分布がテラス状の地形から尾根上に限られ、平坦面から斜面上方にかけて厚みを減じ、東側斜面と南側谷状地形では、多孔質で黄褐色から暗黄褐色を呈する礫を多く含むテフラ層に移行していく。谷の斜面下部には黒色土層が厚く堆積している。この黒色土は台地上面から流れ込んで堆積したものと考えられる。黒色土の分層は難しい。

台地平坦面では耕作土の直下に二次堆積のローム層がみられ耕作時の擾乱がおよんんでいる。遺跡東側斜面に堆積する黒色土も水田造成や耕作によりかなりの部分が擾乱されていたため、遺物包含層や生活面とみられる土層は確認できなかった。



第4図 遺跡の層序 (1/40)

基本層序

- ①明褐色土。繊りがない。マルチを含む。
- ②明褐色土。マルチ、石灰粒子、ビニール紐を含む。
- ③明褐色土。礫を少量含む。
- ④明褐色土。礫を多く含む。
- ⑤橙黄褐色土。水田床土。
- ⑥橙黄褐色土混じりの暗褐色土。
- ⑦暗褐色土混じりの黄褐色土。
- ⑧明褐色土。
- ⑨黄褐色土混じりの暗褐色土。崩れたロームブロック、礫を含む。
- ⑩暗褐色土。 ⑪黒褐色土。
- ⑫暗褐色土。 ⑬暗黄褐色土。
- ⑭黄褐色ローム層。
- ⑮黄褐色ロームを含む暗黄褐色土。マルチ、ビニール紐を含む。
- ⑯明黄褐色ローム層。

第2節 発掘された遺構

1. 縄文時代の住居址

第1号住居址（第5図、図版2-2・3）

検出状況 台地の肩部から検出された。第4号ロームマウンドと重複する。覆土の觀察からローム・マウンドが住居址を切っている。住居址の遺存状況は悪く、住居址壁の一部が確認されたのみである。

遺構の構造 平面形は、一部遺存した壁面と柱穴配置から推測すると楕円形であると考えられる。長軸方向は北西を指す。柱穴は壁際を巡っており、22基が確認された。この中で他に比べ若干深く、口径もやや大きいものが主柱穴と考えられた。P4、21、33、10の4基である。床面からの深さは約30cmである。側柱穴配置は一見乱雑なものに見えるが、壁際を巡るものと思われる。壁は南東の一部にわずかに確認されたにとどまる。残存壁高は7cmで、立上がりは緩やかな弧を描く。床面は全体の約1/5が確認された。硬く締っており、炉の周辺に向い緩やかに傾斜していた。

炉址は住居址中央に位置する。炉石は一個残存しており、熱のためか細かく砕けていた。炉址中央には土器が數き詰められ、周囲には焼土が形成されていた。炉址に敷かれた土器の破片の一部が赤褐色に変色しており、土器が敷かれた状態でがが使用されたものと思われるが、がの使用開始時点から土器が敷かれていたか否かは不明である。土器の直下に安山岩の大きな礫が据えられていたが、礫には火を受けた痕跡は認められなかった。焼土は礫を覆っており、焼土形成時には既に礫が存在していたものとみられる。炉址下部から円形の掘り込みP25が検出された。炉の中心とP25はずれしており、住居址以前の時期の土坑であると思われる。深さは20cmで、黒曜石剥片2点が出土した。

住居址覆土は2層に分層された。住居址覆土は炭化物を含み、第5層上面からは焼土が検出された。

遺物の出土状況 遺存した覆土が薄かったためか、出土遺物は少ない。第4号ローム・マウンド覆土より、第1号住居址出土土器と同一個体である土器が出土したことから、第4号ローム・マウンド出土遺物の大半は第1号住居址に伴うものであると考えられる。遺物は床面よりやや上位に分布していた。

石器は全て黒曜石製で、剥片と碎片が主体である。床面上から黒曜石石核1点と黒曜石原石1点が、P3からは石錐の完形品1点が出土した（第14図2）。

遺構の時期 炉址出土土器から縄文時代前期末葉諸磈C式併行期の住居址であると考えられる。

第3・4号住居址（第6図、図版3-1）

検出状況 台地肩部の一画から柱穴状のピットが多数検出された。第1号住居址北に位置する。床面、炉址等住居址であることを示す遺構は検出されなかった。

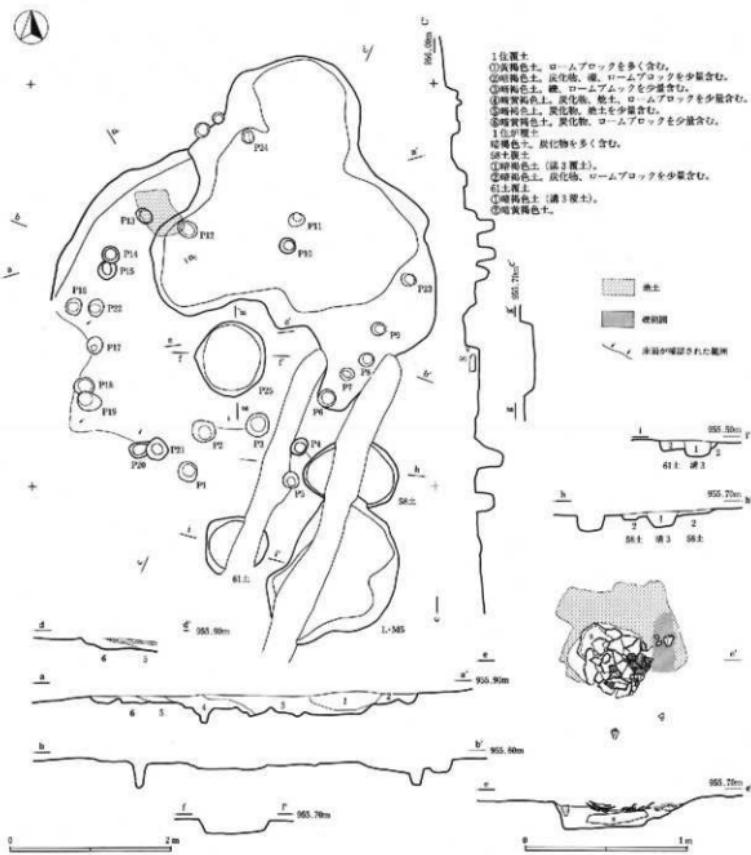
遺構の構造 柱穴配置は柱穴の口径と深さを基準に配列を調査した。2基分の柱穴配置がみられたものの炉址が検出できず、柱穴配置についてはなお検討を要するものと思われる。

第3a号住居址P1からP4と第3b号住居址P5からP8では主軸方向がほとんど変わることから建替えの可能性が考えられる。

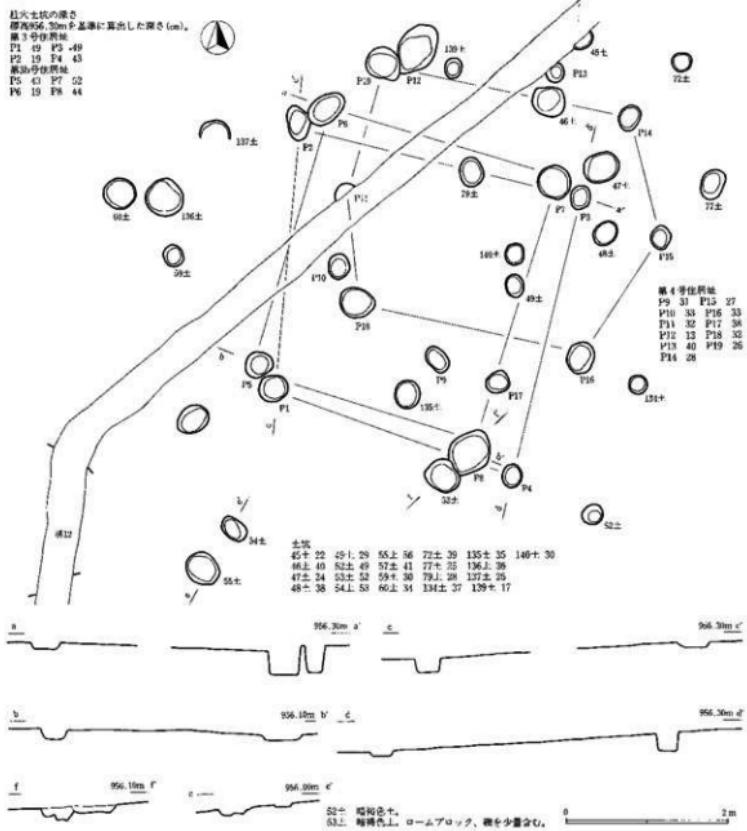
第4号住居址主柱穴は口径がやや大きいP16、18、19、14であると思われ、これら4本の主柱穴間に広がるP9からP17は側柱穴あるいは支柱穴であると考えられる。

遺物の出土状況 柱穴から土器破片が出土したのみである。

遺構の時期 第3a、3b号住居址については柱穴出土土器から（第13図47、48）中期中葉須佐期であると考えられる。第4号住居址P10出土土器（第12図19）から、縄文時代前期末葉諸磈C式併行期であると考えられる。



第5図 第1号住居址(1/60)と炉址(1/30)

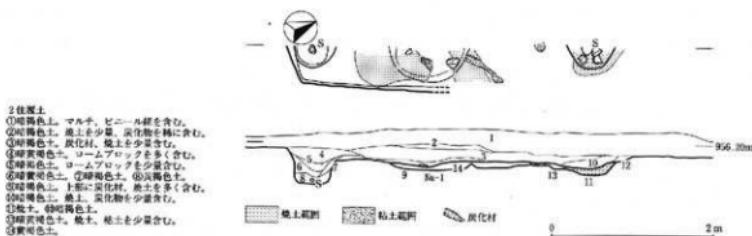


床面は軟弱で、周溝は確認できなかった。東壁寄りの床面下から床下土坑が検出された。

本住居址の覆土からは炭化材と焼土が多量に検出された。炭化材は住居址中央に向って倒れたかのような状態で遺存しており、焼土がそれを覆っていた。炭化材と焼土の検出状況から、本住居址は焼失家屋であると考えられる。

遺物の出土状況 炭化材の下部、床下土坑の直上の床面から黒色土器壊1個体が出土した。他は破片資料である。土器では甕と壺、黑色土器壊、灰釉陶器高台、山茶碗が出土している。遺物は焼土層を境に上下2層に含まれており、山茶碗は上層から出土した。

造構の時期 出土した土器、施釉陶器などからみて、平安時代後期であると考えられる。



第7図 第2号住居址 (1/60)

3. 壁穴

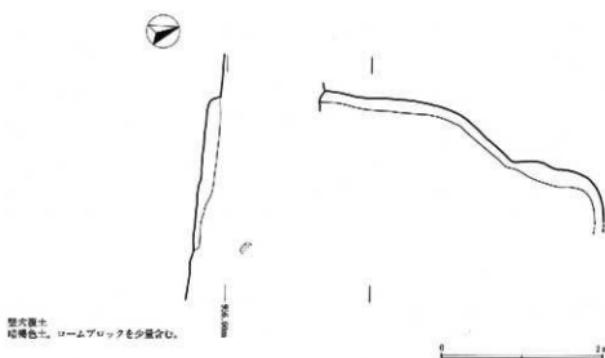
第1号壁穴 (第8図、図版3-3)

検出状況 東斜面上部に位置する。斜面上部で乱れた壁面が確認できたのみである。

造構の構造 遺構南西隅のローム・マウンド覆土上層から焼土が検出された。本遺構にともなうものとも考えられる。床面や柱穴、周溝などの住居址内の施設は確認できなかった。

遺物の出土状況 調文土器及び平安時代土器片、灰釉陶器壊破片が少量出土した。

造構の時期 遺構の特徴が把握できず出土遺物も少量であることから、時期は特定できない。



第8図 第1号壁穴 (1/60)

4. 土坑（第9図、第10図、図版3-6）

土坑の分類 調査区内からは多くの落ちこみが検出された。このうち形状に規則性がみられ、立上がりが明確なもの、覆土の色調が安定しているものについて土坑と判断した。

土坑は、大きさ、平面形、立上がりの形状、深さにより分類し、得られた類型ごとに整理して報告する。遺物の出土状況と覆土の堆積状況については分類基準とはせず、分類により得られた類型ごとにまとまりがみられる場合特に記述した。

土坑の覆土は暗褐色Ⅰと黒色Ⅱに大別された。殊に口径が小さい柱穴状の土坑において色調の差が著しい。覆土が黒色である土坑は掘り方が浅く、立上がりが不明瞭である傾向が強い。

第I群 平面円形の土坑（第9図、図版3～5）

A類 口径50cm以上を中心とし、立上がりがタライ状をなす土坑。確認面からの深さは一定しない。この類の土坑は口径の大きさによってさらに細分できる。

1種 最大径が140cm前後の土坑。磨石と一括りのある黒曜石石屑が出土した。6基検出された。

第8、43、62、63、78、81号土坑

2種 最大径100cm前後の土坑。土器小破片、黒曜石剥片が少量出土した。11基検出された。

第37、39、40、41、44、61、120、121、122、123、124号土坑

B類 最大径50cm未満が中心となる土坑。いわゆるピットである。浅いものが多い。断面形状が柱穴と類似する。覆土の観察によれば、埋め戻しによるロームブロックの混入が認められるものはわずかである。遺物が出土したものはほとんどない。断面形状により細分できる（第10図、図版5）。

1種 立上がりが直に近い土坑。8基検出された。

第26、31、32、33、34、84、85、133号土坑

2種 立上がりが緩やかな土坑。77基検出された。

第5号土坑など

第II群 平面椭円形の土坑。第I群と同様確認面からの深さは一定しない。断面形状により細分できる。

A類 立上がりがタライ状の土坑。1基検出された（第5図）。

第58号土坑

B類 立上がりが緩やかな土坑。坑底の凹凸が目立つ。3基検出された（第10図）。

第24、43、127号土坑

第III群 平面形状が長楕円形の土坑。本遺跡で検出された遺構のうち、確認面からの深さが他の遺構に比べ深い土坑。大きさと坑底ピットの有無により細分できる（第10図、図版6）。

A類 坑底ピットが設けられた土坑。1基検出された。

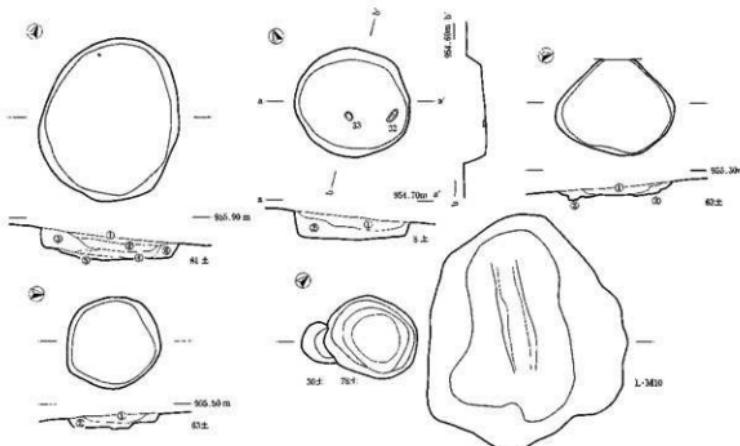
第65号土坑

B類 坑底ピットが検出されなかった土坑。Aに比べやや小振りである。1基検出され、平安時代土師器破片1点が出土した。

第3号土坑

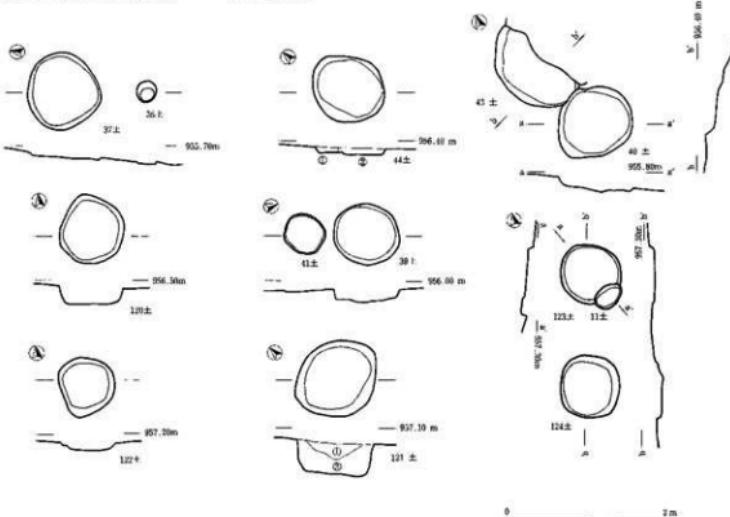
土坑の形態について 第III群A類は坑底ピットの存在から陥穴と認定することができる。第III群B類はA類よりも小振りであり、用途は不明である。また第I群A類とB類は大きさの点で隔絶し、機能が全く異なる土坑である。以上の点から、第I群A類とB類、第III群A類とB類は各々構築した目的が異なるものと理解したい。

第II群A類とB類は立上がりの形状と坑底の状況が異なる。立上がりの形状は構築時の意識や使用方法、施

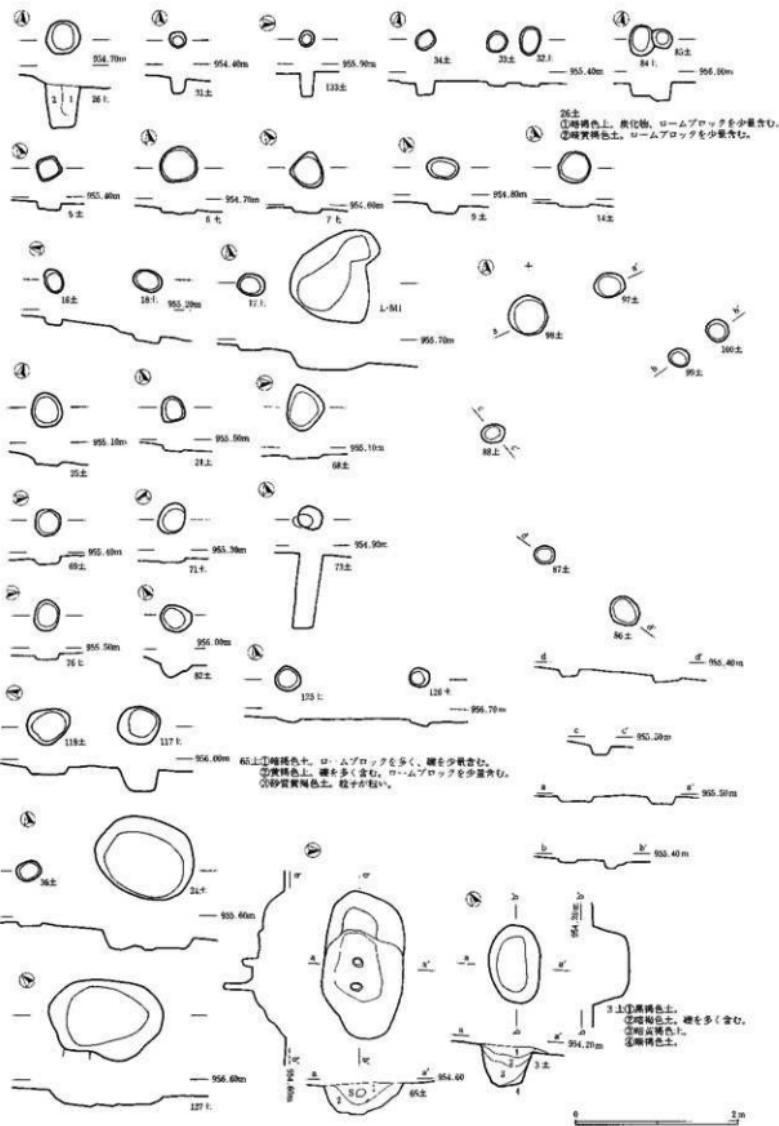


81土①暗褐色土。②暗褐色土。ロームブロックを多く含む。
 82土①黃褐色土。炭化物を多量。ロームブロックを少し含む。
 83土①暗褐色土。炭化物。ロームブロックを少量含む。
 84土①暗褐色土。炭化物を多量含む。
 85土①暗褐色土。炭化物を多く含む。
 86土①暗褐色土。炭化物を多量含む。
 87土①黃褐色土。
 63:1①亞褐色土。②亞褐色土。
 76土①暗褐色土。
 44土①暗褐色土。炭化物を含む。②黃褐色土。

40上 喀褐色土。
 41土 喀褐色土，氯化物含量
 120土 喀褐色土。
 121上 ①喀褐色土，②黄褐色土。
 122土 喀褐色土。
 123土 喀褐色土。
 124土 喀褐色土。



第9図 土坑第Ⅰ群A類、第Ⅱ群B類(1/60)



第10図 土坑第I群B類、第II群、第III群 (1/60)

絶過程が反映したものと考えられることから、第II群A類は大きさおよび断面形状が類似する第I群A類2種に含めて捉えておきたい。以上の理由により、本遺跡では陥穴である第III群A類、立上がりがクライ状で平面がほぼ円形を呈する大型土坑である第I群と第II群A類、立上がりが緩やかで平面が凸形の第II群B類、柱穴状の形状をもつ第I群B類の4つの大きなまとまりが得られた。

第I群A類は大きさの点で1種と2種に細分される。

土坑の分布について 第III群は陥穴の選地に一致する。第I群B類は調査区全面に広がり偏在は把握できなかったが、比較的深く立上がりが明瞭な第I群B類1種は第1号住居址周辺に集中している(第17図)。

第I群A類は南斜面の浅い谷をめぐる尾根状の地形に集中する。第I群A類1種と2種は分布を異にしている。第I群A類1種は東斜面下と谷東側の尾根および谷西側の尾根の3群に分れて分布するのに対し、第I群A類2種は谷東側の尾根から東斜面上部と谷北側平坦面の2群がみられる。

遺物の出土状況と時期 第II群と第III群からはほとんど遺物が出土していない。第III群A類である第65号土坑から縄文時代前期末葉諸磯C式併行期の土器片が出土しており、諸磯C式併行期以前の陥穴であると考えられる。第III群B類である第3号土坑からは平安時代の土師器小破片が出土し、縄文時代の上坑である可能性は薄い。第II群の上坑では石錐が出土した第31号土坑以外に、出土遺物から遺構の時期が特定できるものはない。第I群A類のうち諸磯C式併行期の土器を出土した土坑として、第8、62、63号土坑(1種)、121号土坑(2種)がある(第12図)。第I群A類については土坑の形態と出土遺物から、そのほとんどが縄文時代前期末葉に属す可能性が高いと考えられる。

第I群A類からは比較的多くの遺物が出土したが、第I群A類1種と2種ではやや出土遺物の傾向が異なる。第I群A類1種である第8号土坑底直上から凹石1点、磨石1点が出土し、第8、62、63号土坑からは一括りのある黒曜石石屑が出土した(第12・13図、図版9-10)。第I群A類2種では、土器小破片が出土した第121号土坑と黒曜石剝片が少量出土した第61号土坑がある。

5. ローム・マウンド(第9図、第10図、図版6-7)

ローム・マウンドは19基検出された。規模の点で大型と小型に分けられる。大型のローム・マウンドには深いものが稀にみられたが、小型のローム・マウンドは一様に浅い。平面形状はまちまちであるが、ほぼ円形に広がるものが多い。大型で深いものとしては第10号ローム・マウンドがある。第10号ローム・マウンドの底面からは、ローム・マウンド範囲外に伸びる断面円形の掘り方が検出され、この中に炭化材が多く含まれていた(第9図、図版6-7)。同じものが第2号ローム・マウンド南東隅からも検出された。溝状の掘り方がローム・マウンドに伴い形成されたものかについては類例を待ちたい。

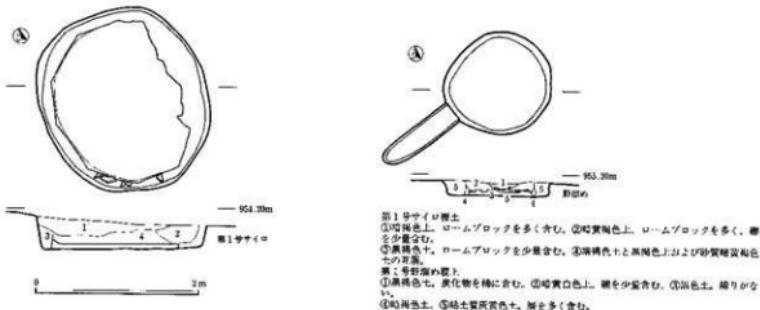
遺物は少量出土している。ローム・マウンドは風倒木痕と考えられているが、第2、7、10号ローム・マウンドでは縄文前期初頭から中期中葉の土器破片が出土している(第12・13図)。これらの出土遺物からローム・マウンドの形成時期は縄文時代前期初頭以降であると考えられる。ローム・マウンドの大きさの意味や形成時期の決定については不明瞭な部分を残すが、ローム・マウンドは遺跡環境や景観を探るひとつの視点となりうると思われる。

6. 近世から現代までの遺構

溝(第18図、図版6-3-4)

12基検出され、3群に分類できる。

I群 暗渠の構造をもつ溝である。2段掘りの断面形状を呈し、下部の細い溝の上に割り石を敷き詰めている。6基検出された(図版6-3)。



第3節 発掘された遺物

I. 繩文時代の遺物

土器 (第12・13図、図版7・8)

今回の調査で出土した土器のうち、主体となるものは前期末葉の土器である。繩文時代前期初頭および繩文時代中期初頭、中葉の土器はごくわずか出土したにすぎない。

縄文時代前期初頭の土器 (第12図1)

第2号ローム・マウンドより縄文時代前期に比定される土器が1点出土した。胎土に纖維を含み、付加条縄文が施文されていることから、前期初頭に属するものと思われる。

縄文時代前期末葉の土器 (第12、13図)

今次調査で出土した土器の大部分を占める。地文に集合条線文を施すものが主体をなし、縄文を施文する土器が作る。

分類

第I群 地文に半截竹管工具による集合条線文を施す。口縁部が外反し胴部が内半する器形である。口縁部には波状口縁と平縁がある。底部は胴部からやや張り出すものと、胴部から底部にかけて段を有し、台状を呈するものがある。破片資料が主体であるため文様帯構成は不明な点が多いが、大きく口縁部、胴部、底部の文様帯に分かれている。口縁部文様帶は口唇直下と口縁部に綴分でき、口唇部直下の文様帶には結節沈線文あるいは平行沈線文が施文される。胴部文様帶は口縁部と胴部を区画する文様帶と胴部文様帶に分れるが、口縁部と胴部の境界の文様帶は省略されるものがある。

1類 結節浮線文が施される。

A 結節浮線文により渦巻文やレンズ状文など曲線によるモチーフを描く。

1 ボタン状貼付文が施文されたもの (32~34)。

2 ボタン状貼付文がみられないもの (2, 21)。

B 結節浮線文が棒状モチーフを描く。結節浮線文の中には隆帶上に半截竹管で刺突を加えたかの様な効果をもつものが含まれる。

1 ボタン状貼付文が施文されたもの (3, 4, 6, 35)。

2 ボタン状貼付文がみられない (5, 7, 8)。

C 半截竹管を断面三角形に成形した隆帶に刺突する結節浮線文と同様の効果を狙ったと思われるもの。棒状モチーフを描く。ボタン状貼付文はみられない (20, 24)。

2類 結節沈線文が施される。

A 結節沈線文が棒状モチーフを描く。ボタン状貼付文はみられない (9)。

B 平行沈線の内部に半截竹管による刺突を加え、結節沈線と同じ文様効果を狙ったもの。ボタン状貼付文を有する (10)。

C 結節沈線が施される。モチーフは不明 (30, 31)。

3類 平行沈線文がレンズ状文を描く。ボタン状貼付文を有する (17, 18, 38~40)。

4類 集合条線文による幾何学的文様のみが施文されたもの。口縁部破片では横位の矢羽根状斜状の構成をとり (11, 12, 25)、胴部破片では縱位の構成をとる (16, 22, 27, 28, 41)。底部は口縁部と同様横位の矢羽根状構成をとる (15)。

A ボタン状貼付文が施文されたもの (11, 12, 15)。

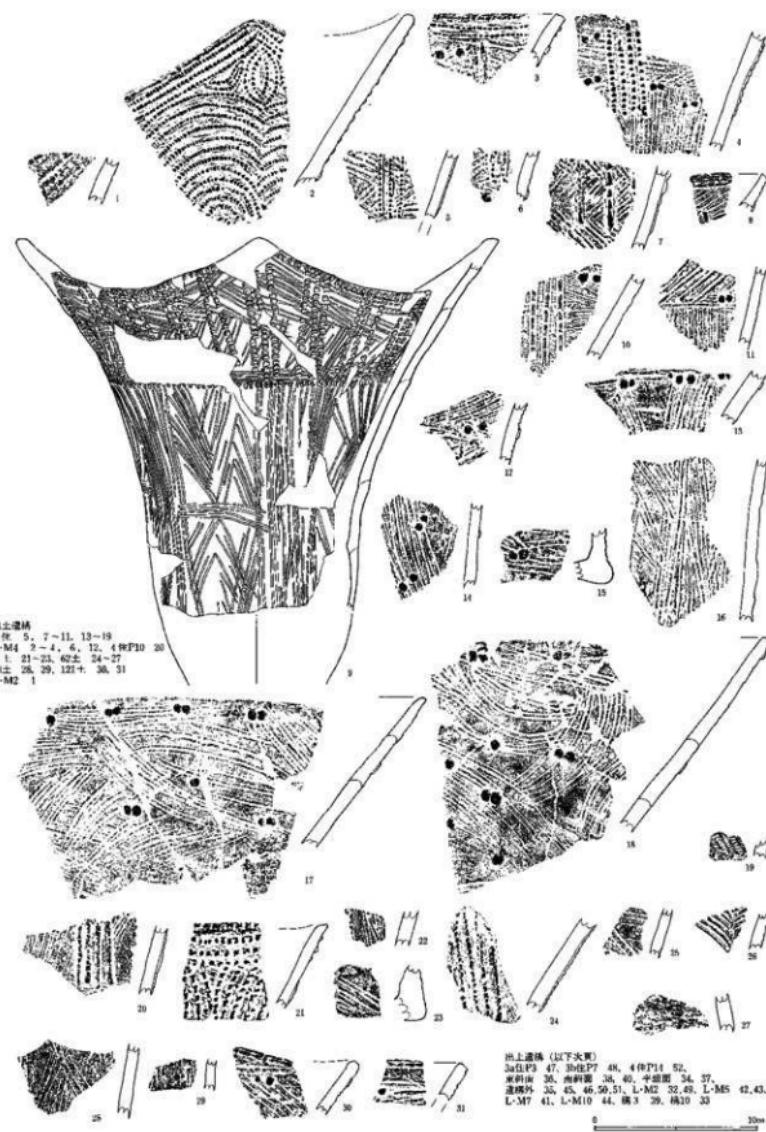
B ボタン状貼付文が施されないもの (13, 16, 22, 25, 28, 41)。

5類 集合条線文のみが施文されたもの。ボタン状貼付文が施されない (27, 29)。

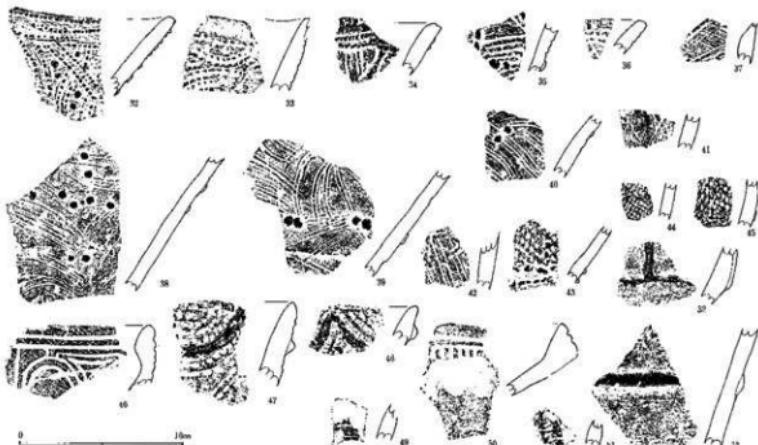
第II群 地文に半截竹管による集合条線文を施す。平行する沈線間は半降起線状となる。

1類 渦巻き文など曲線によるモチーフを描く。ボタン状貼付文はみられない (26)。

2類 幾何学的文様を描く。ボタン状貼付文がみられない (37, 42)。



第12図 繩文時代前期初頭と前期末葉の土器 (1/3, 9 1/4)



第13図 前期末葉から中期中葉の上器 (1/3)

第三群 地文に縄文を施す。小破片であるため器形は不明である。

1類 結節浮線文が施される (43)。

2類 縄文のみが施されたもの (19, 44, 45)。

第四群 無文であるが、胎土は精選され器面調整も丁寧で、表面が平滑である。色調は赤褐色である。有孔土器の肩部と思われる資料である (図版8-4)。

諸職C式併行の土器は結節浮線文系、結節沈線文系、沈線文系に整理されることが多い。第1号住居址出土土器には3種類の文様要素が含まれ、2個1対に施されたボタン状貼付文との関係が比較的明瞭に観察することができる。浮線文の施文方法が押引風の施文方法をとる第1類、第2類にはボタン状貼付文がみられるが、断面三角系の隆帯に刺突に近い刻みを加え結節状浮線文とする第3類にはボタン状貼付文がみられない。

結節沈線文のうち押引風の施文方法をとる第1類にはボタン状貼付文がみられないが、竹管刺突による結節沈線文ではボタン状貼付文が施された土器がみられる。なお第12図9は赤塙仁、三上徹也氏の分類によるC I器形に相当する。

平行沈線文により孤状モチーフを描く第3類では、ボタン状貼付文がみられない。

多載竹管により集合条線文を施す第II群では幾何学的モチーフを描く第2類にのみわずかにボタン状貼付文がみられた。

縄文時代中期初頭から中葉の土器 (第13図)

中期初頭の口縁部破片1点が、台地平坦面から出土した(46)。縄文を地文とする土器で、棒状工具による沈線文でモチーフが描かれる。九兵衛尾根II式である。

中期中葉の中期中葉の土器は第3号住居址P3とP7、第2号ローム・マウンド、遺構外より出土している。

第3号住居址柱穴から出土した土器は口縁部破片である(47, 48)。破片資料であるため、口縁部からモチーフは不明であるが、隆帯に沿って角押文が施されその脇にベン先状工具による連続刺突文が施される。この特徴は棚畠遺跡中期中葉第I群3類D種と共通するもので、棚畠中期中葉I段階とされた洛沢期のなか

でも新しい段階に属するものとされている。⁽³⁾このほか、第2号ローム・マウンドから口縁にペン先状工具による連続刺突文を2条巡し、内部にペン先状工具による押引文を施す浅鉢破片1点が(50)、第10号ローム・マウンドより押引文が施される四角形を呈する土器底部が出土した。造形外からは隆脣脇にキャタピラ文を施した中期中葉の土器が1点出土した(51)。

石器（第14・15図、図版9）

出土した石器の概要

本遺跡から出土した石器には、石錐4点、石錐1点、スクレイバー1点、剥片石器17点、打製石斧3点、凹石2点、磨石1点、ハンマー1点の他、石器製作により生じた「石屑」といえる石器がある。石器は素材の材質と形状、製作技術により3群に分類できる。黒曜石やチャートに代表される光沢をもち石錐や剥片石器など小型石器に用いられる第I群、打製石斧など大型の石器に用いられ、光沢がなく大きな剥片が容易に得られると思われる第II群、凹石など礫素材を変形することなく石器とする第III群である。「石屑」についてそれぞれの群ごとに内訳をみると、第I群のうち黒曜石製のものは石錐欠損品5点、石錐未成品16点、石錐欠損品1点、未成品15点、調整加工のみられる剥片5点、両極打法による石器22点、剥片類252点、碎片337点、石核と原石が16点であるのに対し、チャート製の石器はスクレイバー1点、未成品1点、剥片1点であり、黒曜石製石器が大部分を占める。チャート製石器は遺跡内で製作されていたらしいものの、客体的な石材であったと理解できる。第II群では剥片1点、碎片2点と極く少く、第III群素材礫は出土しなかった。

分類の基準

石錐欠損品と石錐未成品

石錐の欠損品については、集落内に残されていたという点で製作時の失敗作品である蓋然性が高いと考え、石器製作に関わる石器として記述した。石錐未成品は形状が不整形で調整剝離が一様でなく厚い(5~10)。

調整加工のある剥片と剥片石器およびスクレイバー

剥片素材の石器のうち縁辺にのみ連続した調整が施されている石器を剥片石器(13~15)とし、素材と調整部位は剥片石器と同様であるが、調整が連続しない石器については調整加工のある剥片として分類した。調整加工のある剥片は、石錐や剥片石器など剥片を素材とする石器の未成品である可能性が考えられることから石器製作に関わる石器と考えた。スクレイバーも素材と調整部位は前二者と同じであるが、素材が大きく厚みがあり素材の形状を反映して刃角が鈍く、刃部自体の厚みがある。刃部調整は剥片石器と違い調整の密度が高い(12)。

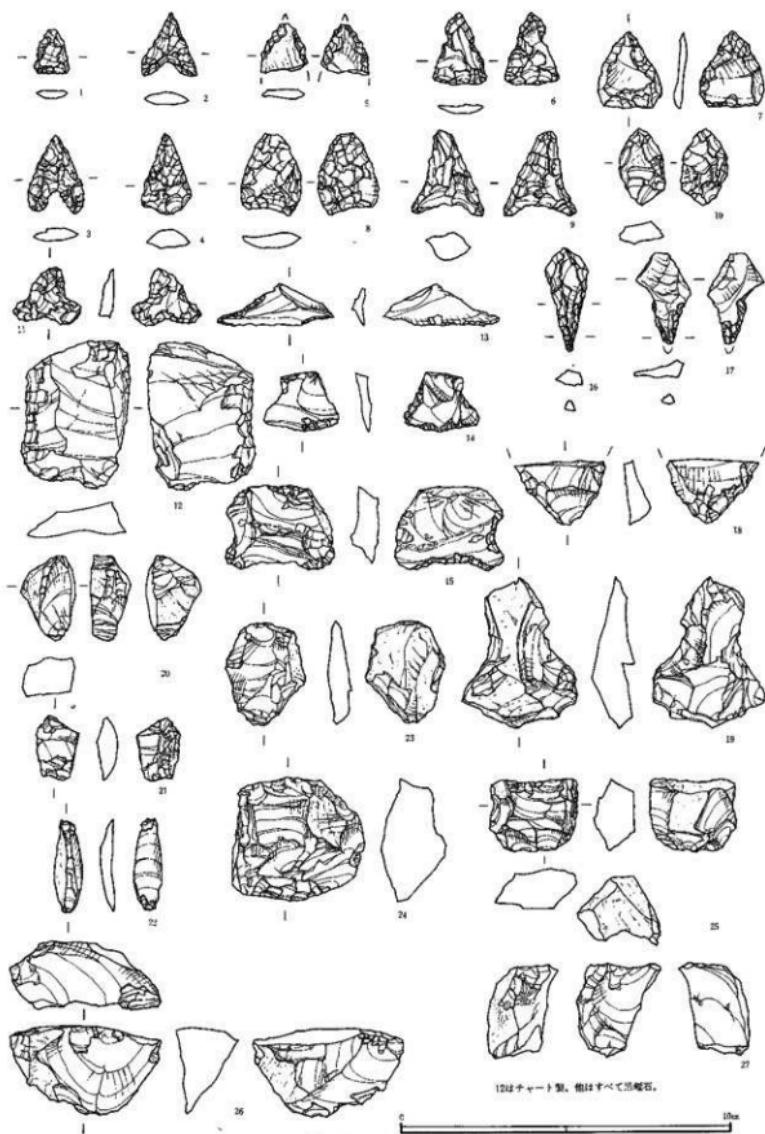
両極打法による石器

両極打法により生産された石器をすべて含む。素材に剥片素材(21)と礫素材(20,23~25)がみられる。大きさは漸移的で形状は多様である。両極打法により生産された石器の評価については、断面形状が楔形をとるものについては、木材や竹を打ち割る石器の製作と使用により生じるとする見解の他、両極打法により生産された石器全体を捉え、石器製作に関わる石器群と評価する意見もある。⁽⁴⁾本遺跡では断面楔形をとるもの(20,21,23)と断面が方形あるいは逆三角形に近い形状をもつものおよび剥片がみられる(22,24,25)。

石器未成品および石核

未成品としたものは多くの場合、剥片あるいは礫素材の縁辺から中心に向い貝殻状の剥離が観察されるものが多い(18,19)。素材の厚みをとる目的で調整が施されている場合が多いと考えられる。未成品としたものは、目的とした器種が不明であるため一括して分類した。

未成品と石核の分類は難しく、殊に礫素材の未成品と石核の分類基準に曖昧さが残る。今回は石器製作の



第14図 石器 (2/3)

12はチャート製。他はすべて三鷹石。



第15図 石器と石製品 (1/3)

ために目的剥片を剥離した石塊を石核とする立場から、石鎚、剥片石器など小型石器の素材となり得る剥片を剥離した痕跡が観察されるものを石核とし(26,27)、より小さい剥離痕が連続した状態で観察される石器を未成品と考えたが再検討を要するところである。

石器の時期と組成

御作田上の平遺跡出土の石器群は、出土:土器と造構の時期から縄文時代前期初頭と前期末葉、中期初頭、中期中葉に属する可能性がある。石器のうち時間的な変化が比較的よく表れる石鏃をみると、平面形状が三角形の石鏃は前期初頭に属する可能性が大きく（1）、打製石斧では比較的小型で縦断面が湾曲しない打製石斧（29）が阿久遺跡の例等から考えて前期末葉に属するものと考えたい。

前期末葉の遺構から出土した石器の組成を遺構ごとにみると、石器製作に関わる石器が主体を占めていることがわかる。第1号住居址では石鏃1点、剥片石器1点、両極打法による石器3点、石鏃未成品3点、未成品7点、剥片類50点、碎片90点、石核2点であり、全て黒曜石製石器である。縄文時代前期末葉に属する可能性が高い第I群A類の土坑出土石器では、第8号土坑から円石1点、磨石1点、剥片石器欠損品1点、剥片類6点、碎片3点があり、第62号土坑では石鏃欠損品1点、剥片石器1点、調整加工のある剥片1点、未成品1点、剥片類5点、碎片14点がある。第63号土坑では石鏃未成品2点、調整加工のある剥片1点、剥片類16点、碎片50点、石核2点が出土した。第124号土坑は剥片1点のみである。このほか第I群B類1種で

ある第31号土坑からは石錐1点が出土している。上記の石器は凹石、磨石以外は全て黒耀石を用いており、なかでも第62、63号土坑出土石器は肉眼による観察では石材がよく似ている点が特徴的である(図版)。

石製品

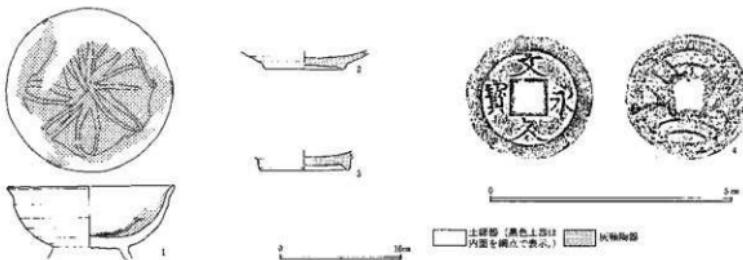
海浜礫が2点出土している。1点はチャート製(図版9-9)、残る1点は石質が不明であるが光沢をもつていて。いずれも成形のための研磨痕が観察できることと、遺跡内や基盤礫層ではいずれの石材の存在も確認できなかったことから、河川などから拾いあげられたものと考えられる。このほか第1号住居址から蛇文岩製の石製品が出土した(34)。周辺から調整加工が加えられ、円形に近い形状に仕上げられている。

2. 平安時代の遺物(第16図)

今次調査では遺構外から、比較的多くの遺物が出土したが、図示できる資料はわずかである。

第2号住居址出土遺物は、土師器窓、环と高台部分の破片の他、黒色土器环、灰釉陶器、山茶碗という構成をとるが、山茶碗は出土層位が異なる。復元、図示できたのは黒色土器环のみである(1)。見込みにかなり乱れた迷弁状を、口縁部内面は連弧状に暗文を施す。土師器窓は口縁部断面形状が方形を呈するものである。同一個体と思われる木葉痕が観察される窓底部破片が出土している。

遺構外からは土師器环、皿、黑色土器环、灰釉陶器の塊や皿とともに壺破片が出土した。出土量からみると灰釉陶器がもっと多く、黒色土器と土師器は少ない。図化できなかったが見込みに裏手状の暗文を描く黒色土器高台环の底部が1点出土した。



第16図 平安時代以降の遺物(1/4、4 1/1)

3. 近世以降の遺物(第16図)

今次調査では遺跡内から極く少量であるが近世陶磁器が出土している。陶磁器はすべて遺構外からの出土である。他に第8号窓の覆土内から文久永宝が出土した(4)。

第IV章 結語

I. 御作田上の平遺跡出土の石器

木造跡出土の石器群の構成は黒耀石製石器を遺構単位にみた場合、少数の石器製品と石器未成品、原石、石核が多量の剥片、碎片に伴うとまとめることができる。遺構外出土石器についても同じ傾向が認められる。このなかで注目されるのは、绳文時代前期末葉の土器破片と共に出土した第62号、63号土坑出土の石器群で、これら2基の土坑から出土した石器群は、石器製作に伴い生ずる石器をほぼ網羅している。

住居址覆土から出土する未成品を含む多量の石器群については、かつて田中英司氏により縄文時代前期前半の事例をもとに、廃絶された住居址を石器製作の場として利用された痕跡を示すものと考えられた。また吹上バターンといわれる遺物出土状況を考慮すると、石器についても一定の時間幅における累積的な廃棄行為、あるいは廃棄行為の主体者が複数であったことが想定し得る。第62、63号土坑出土の石器群については出土量と共伴する土器が一時期に限られることから、住居址出土の石器群に比べ、廃棄行為の統いた時間幅あるいは廃棄行為の主体者が限定されるものと思われる。土坑が石器製作の直接の場であると考えられないならば、土坑に廃棄された本遺跡出土の「石屑」は、石器群に原石を含む点からも限られた時間内に行なわれた石器の製作過程を示す資料として扱うことができるものと考えられる。

2. 諸磯C式併行期の集落としての御作田上の平遺跡

縄文時代前期末葉における御作田上の平遺跡の遺構構成は、比較的近距離に構築された少數の住居址と土坑からなる。土坑と住居址の同時性については曖昧な部分を残すが、土坑と住居址が狭い範囲にまとまる傾向と土坑が群在するあたりは高風呂遺跡や櫛畠遺跡の前期末葉の集落構成に類似する。大泉山東方に分布する中期初頭の遺跡群構成についてまとめた守矢昌文氏の見解によれば、御作田上の平遺跡はcタイプに属するものと考えらる。現在までの調査事例からみて、大泉山東方の小地域における前期末葉の遺跡においては、前期末葉でも本遺跡より新しい段階に属すaタイプの遺跡である鴨田遺跡と、bあるいはcタイプと考えられる稗田頭A遺跡があり、稗田頭B遺跡に代表されるeタイプ、稗田頭C遺跡に代表されるaタイプが欠けていくことになる。縄文時代前期末葉に限ってみれば、大泉山東方遺跡群には少なくともaタイプとcタイプの2類型の遺跡が、大泉山西方にはcタイプの遺跡であるみられることになる。今後内容が不明確な稗田頭A遺跡の内容が明らかにされるならば、大泉山東方と西方の遺跡群の形成と変遷過程および両遺跡群の関係についてより詳細に明らかにすることができるものと思われる。

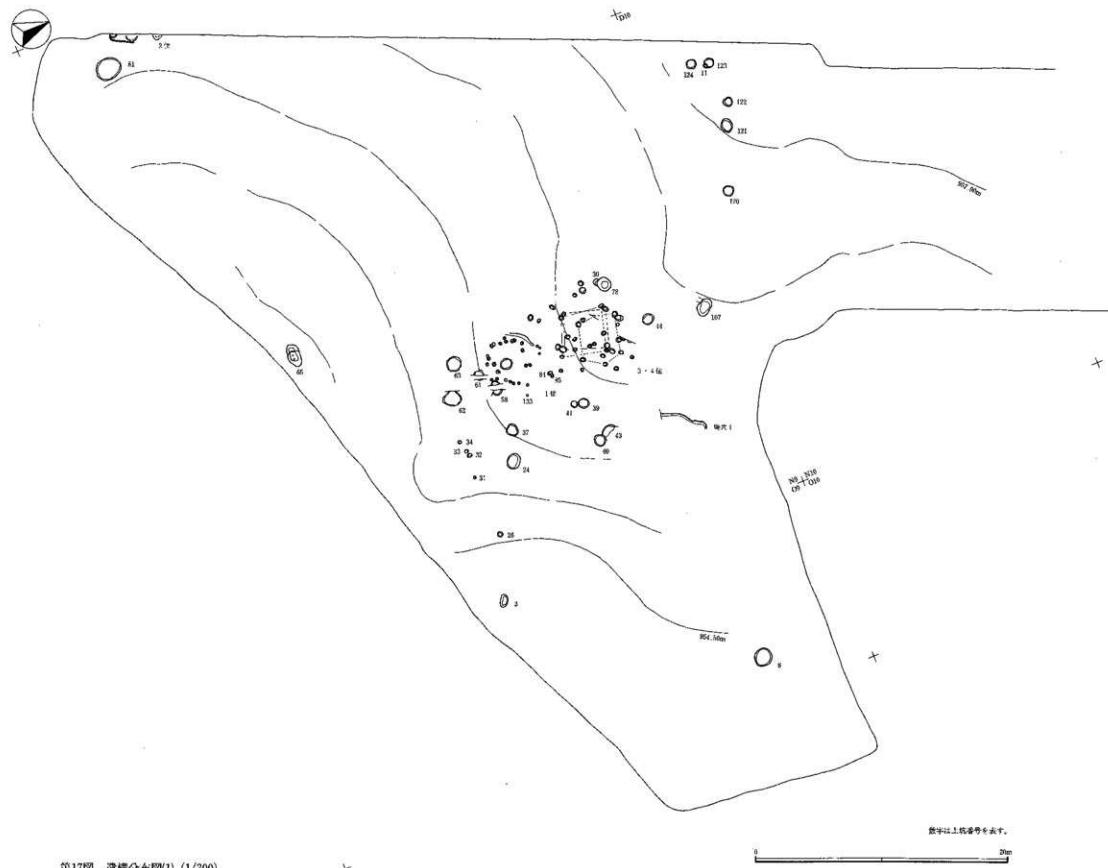
3.まとめ

御作田上の平遺跡の継続時期は今回の調査により、縄文時代前期初頭、前期末葉、中期初頭、中期中葉、平安時代、近世となった。大泉山東方の遺跡群の継続年代とはほぼ一致する。遺跡群単位でみると、御作田上の平遺跡は大泉山東方遺跡群とは異なる遺跡群に属するものと考えられる。今後は大泉山東方の縄文時代早期末に始まる遺跡群の形成過程との対比が調査課題となると思われる。

平安時代の集落址については、大泉山東方に広がる小規模集落との関連が注目される。御作田上の平遺跡においてはかつて第II次調査の際、平安時代後期の住居址が検出されており、住居址の分布範囲は比較的広いものと判明した。今後辺境の小規模遺跡との対比において、集落における住居址の密度と継続年代が問題となろう。

引用参考文献

- (1) 富坂虎次 「第二章縄文時代 第二期八ヶ岳西南部の遺跡」『茅野市史 上巻 原始古代』茅野市1986
- (2) 木塚仁、三上徹也 「下島式・晴ヶ峯式の舟掘跡とその意義 - 縄文時代前期末葉十数群の型式変化とおして - 」『中部高地の考古学IV』長野県考古学会1994
- (3) 守矢昌文 「櫛畠遺跡における遺文土器群の構成について」『櫛畠遺跡』茅野市教育委員会1990
- (4) 国村道雄 「ビヌス・エスキーユ(櫛形石器)」『縄文文化の研究7』堀川閣1983
- (5) 守矢昌文 「第IV章第1節9 條畠打法による石器群」「高部遺跡」茅野市教育委員会1983
「第III章第4節2 石器」「櫛畠遺跡」
- (6) 田中英司他 「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会1979
- (7) 守矢昌文 「第IV章第2節 縄文時代中期初頭における稗田頭C遺跡辺境の遺跡の展開について」『稗田頭C遺跡』茅野市教育委員会1994
- (8) 柳川英司 「第IV章第1節 稗田頭C遺跡辺境における平安時代後期の散在住居址について」『稗田頭C遺跡』茅野市教育委員会1994



第17図 遺構分布図(1) (1/300)

数字は上坑番号を表す。



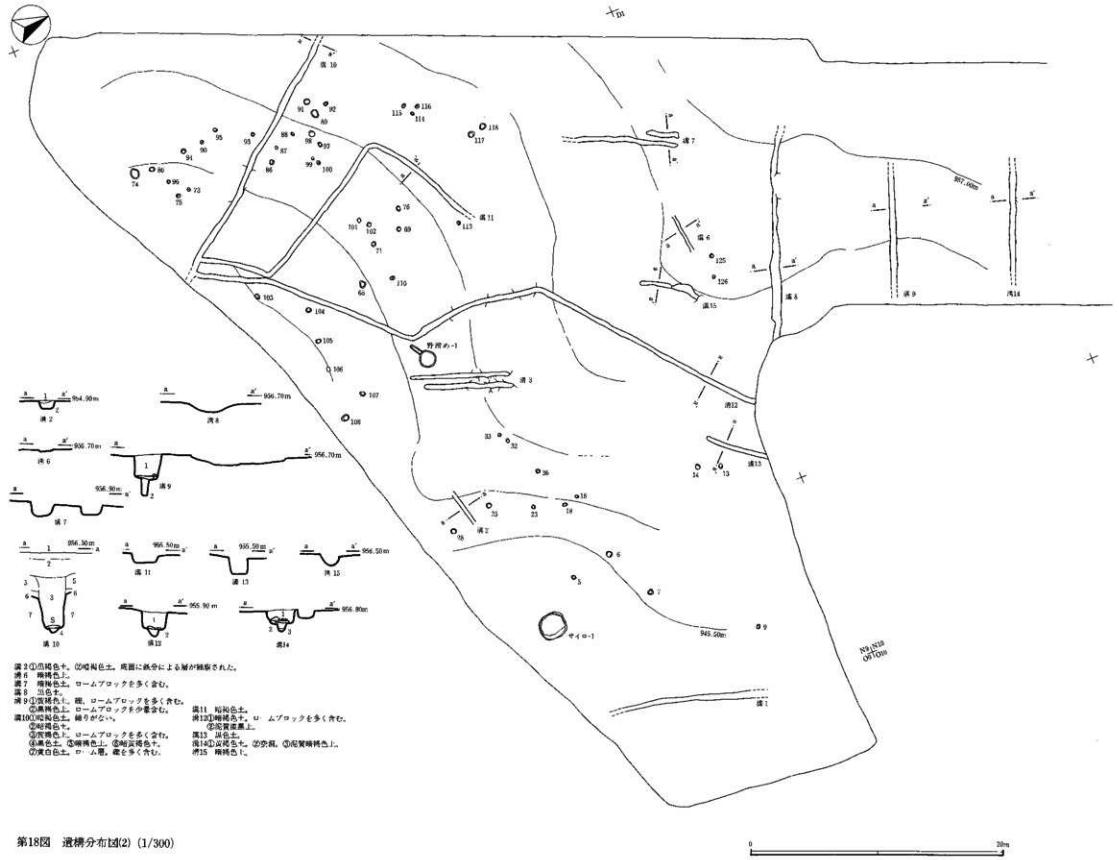


図 版



△1.遺跡遠景（西より。アラビア数字は遺跡番号。）



△2.遺跡遠景（上空より。）



△1. 遺跡前現況
表面採集調査風景
(東より)



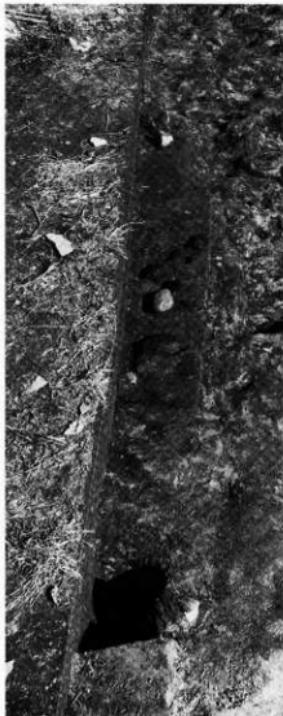
△2. 第1号住居址
(南より)



△3. 第1号住居址
炉址
土器出土状況
(南より)

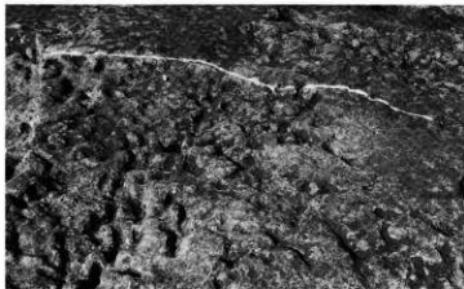
△1.

第3・4号住居址
(南より)



△2. 第2号住居址

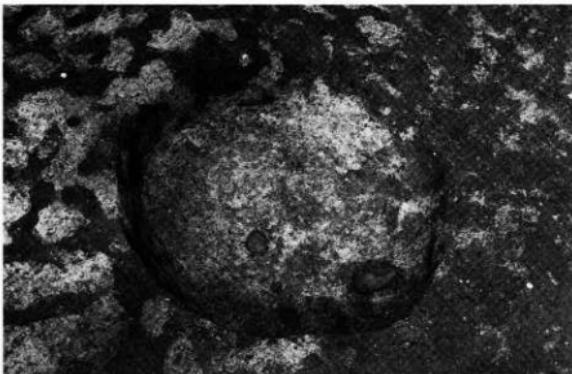
焼土、炭化材検出状況
(南より)



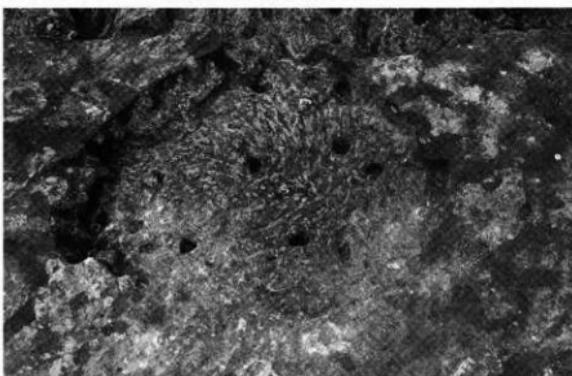
△3. 第1号竪穴 (南より)

△4. 第81号土坑 (南より)

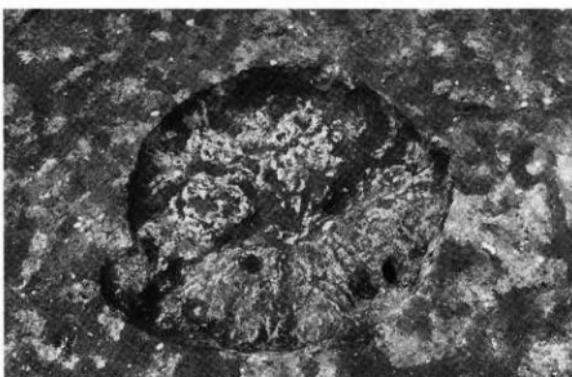




△1. 第8号土坑
(南より)



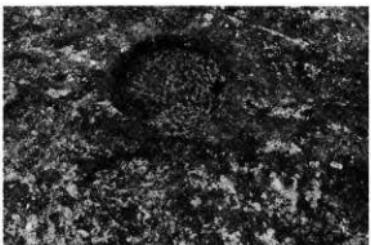
△2. 第62号土坑
(南東より)



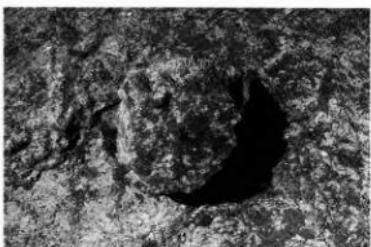
△3. 第63号土坑
(南東より)



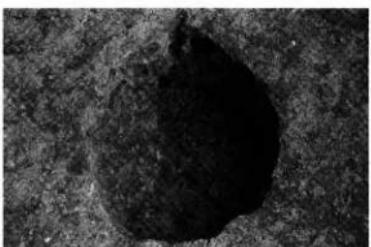
△1. 第58号土坑（南より）



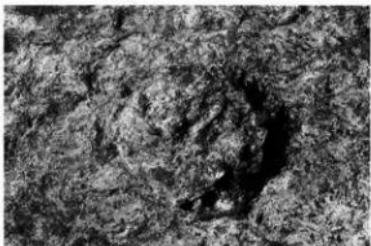
△2. 第39・41号土坑（南より）



△3. 第120号土坑（南より）



△4. 第121号土坑（南より）



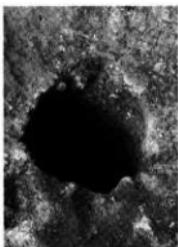
△5. 第122号土坑（南より）



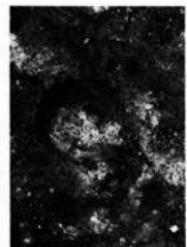
△6. 第123号土坑（南より）



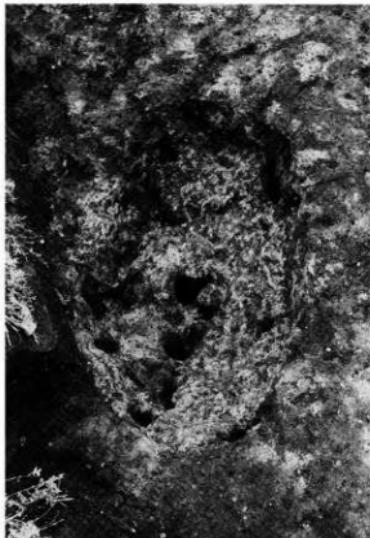
△7. 第124号土坑（南より）



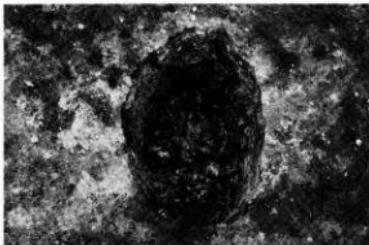
△8. 第26号土坑（南より）



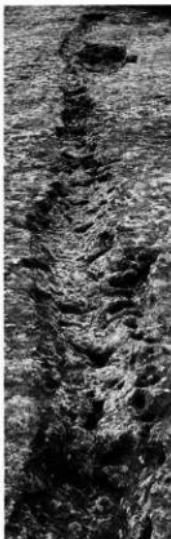
△9. 第90号土坑（南より）



△1.第65号土坑（東より）



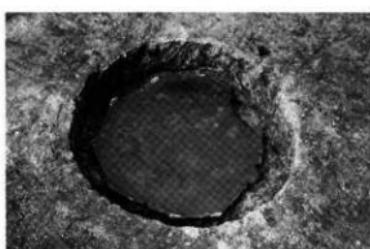
△2.第3号土坑（南西より）



△3.第8号溝（東より）



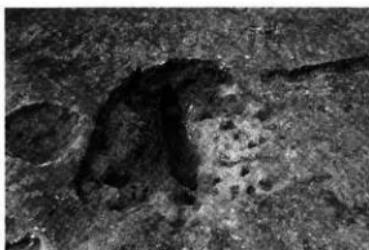
△4.第9号溝（東より）



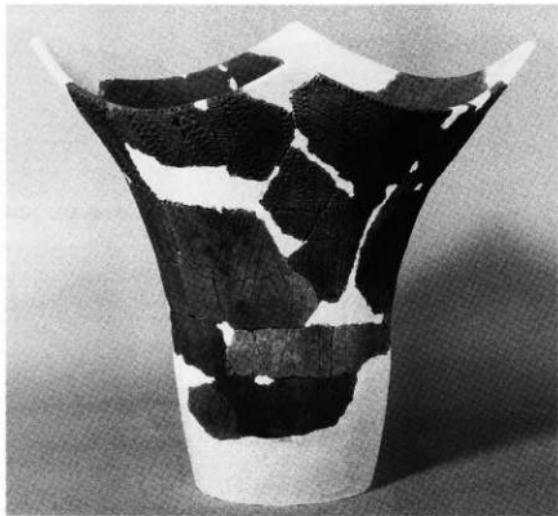
△5.第1号サイロ（南より）



△6.第1号野溜め（南より）



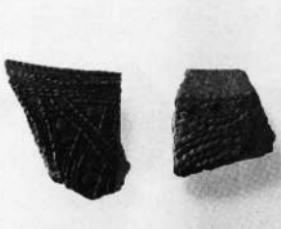
△7.第10号ローム・マウンド（東より）



△1. 第Ⅰ群2類B (1住炉址)



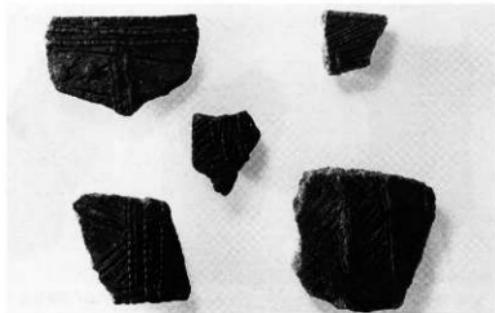
△2. 第Ⅰ群1類A2 (1住)



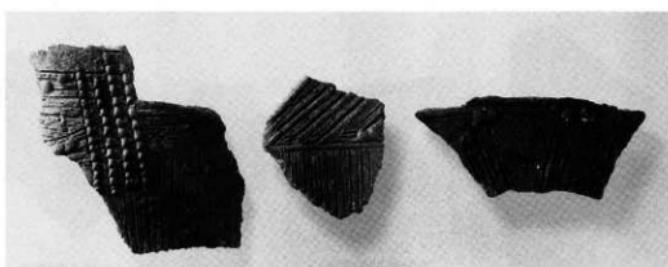
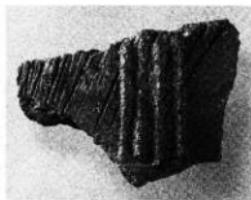
△3. 第Ⅰ群1類A



△4. 第Ⅰ群2類B (遺構外)



△5. 第Ⅰ群1類B (1住)





△1. 石器 (右から2つめは欠損品) (約1/1)



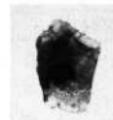
△2. 石器、石器欠損品 (右) (約1/1)



△3. 石器欠損品、未成品 (約1/1)



△4. 肉桿打法による石器 (約1/2)



△5. 同左 (約1/1)



△6. 未成品 (約1/2)



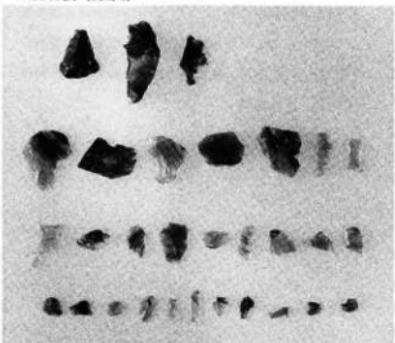
△7. 捜入刺突具 (約1/1)



△8. 石核 (約1/1)



△9. 石製品 (約1/1)



△10. 第63号土坑出土石器 (1) (約1/2)



△11. 第63号土坑出土石器 (2) (約1/2)

報告書抄録

ふりがな	うえのたいらいせき						
書名	上の平遺跡						
副書名	平成6年度県営施設整備事業古田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	功刀 司						
編集機関	茅野市教育委員会						
所在地	〒391 茅野市塚原二丁目六番一号 Tel 0266-72-2101						
発行年月日	西暦1995年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
うえのたいら 上 の 平	ちのしとよひら 茅野市豊平 8783番地	20214 166	35° 59' 48"	138° 12' 50"	19940622～ 19941130	3,540m ²	県営施設整 備事業古田 地区に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
上の平	集落跡	縄文時代前期	住居址3基	縄文時代前期中期 土器・石器・石製品		縄文時代前期末葉の集 落跡。土坑と少數の住 居址の組み合せが特徴。	
		中期	土坑86基	平安時代上飾器、黒色 土器、灰陶陶器			
		平安時代	住居址1基				

上の平遺跡

— 平成 6 年度県営圃場整備事業古田地区に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 7 年 3 月 16 日 印刷

平成 7 年 3 月 20 日 発行

編集 茅野市教育委員会
発行 茅野市教育委員会
長野県茅野市塙原2丁目6番地1号 (0266)72-2101(代)
印刷 ほおづき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5 (0262)44-0235

